

ベアトゥス写本におけるテキストとイメージ生成

宮内ふじ乃（立教大学）

スペインのアストゥリアス地方リエバナの修道士ベアトゥスが 776 年頃に執筆したヨハネの黙示録注解書（原本消失）は、北部スペインを中心に盛んに筆写された。これらを総称してベアトゥス写本とよぶ。ベアトゥス写本を飾る多くの挿絵は、大小を問わず黙示録引用文とその註解との間に置かれる。ところが黙示録 8 章 1 節と 11 章 19 節に対応する 2 点の挿絵は、必ずしもこの配置の原則に従っていない。本発表では、この変則的なレイアウトの問題を出発点として、テキストとそれに対応する視覚的イメージ生成の比較考察を行う。

黙示録 8 章 1 節は、黙示録の引用文の項目がなく註解のみが記されているベアトゥス写本の中でも珍しい箇所であり、挿絵の配置も註解の冒頭に引用されたテキスト「第七の封印を開くと天は沈黙に包まれた」の直後に置かれる。レイアウトの原則からすれば挿絵を描くスペースがないことになる。にもかかわらず、この挿絵はベアトゥス写本の 2 系統 9 写本に保持されている。「天の沈黙」を描くにあたり、ベアトゥス写本では単純ながらも極めて奥深いいくつかの表現方法をとる。それらは 1. 天体と宇宙空間、2. 文字記号、3. 枠内無装飾・無図像、4. 擬人像と天体、の四つに分類できる。但しこれらからイメージの生成過程が段階的に追えるとは言えない。むしろこの多様性は、ヨハネの幻視を観想するにふさわしい表現を模索した結果と考えられる。とりわけオスマ写本（1086 年）は轟音表現を対向ページに置くことによって、来る災禍の前の無音の宇宙の荘厳さを際立たせ、沈黙の中に神の臨在を暗示させている。

黙示録第 11 章には、二人の証人の殺害や第七のラッパの幻視に続いて、19 節に「天にある神の神殿が開かれて、その神殿の中にある契約の箱が見え、稲妻、さまざまな音、雷、地震が起こり、大粒の雹が降った」とある。但し註釈書第六の書の冒頭に引用された黙示録 11 章 19 節のテキストには、いずれの写本にも「一匹の獣が底なしの淵から上って来るのが見えた」という本来の黙示録本文に含まれていない一節がある。そもそもこの獣は 11 章 7 節で二人の証人を殺害するために登場するのだが、ベアトゥスの引用文では本来あるべき箇所から抜け落ち、19 節に加えられた。この特殊なテキストが、エスコリアル写本（1000 年頃）に代表されるような風変わりなレイアウトを生み出した要因であることはすでにクライン（1976 年）が指摘している。本発表では、2007 年 10 月に発見されたジュネーヴ写本（BGE. Ms. 1 at. 357、11 世紀後半に南イタリアで制作されたと推定）を加えて、この場面のレイアウトと図像の変遷を再考した上で、古式を残す写本系統 I 群 3 写本における「開かれた天の神殿」の単純な構図と図形だけで表された壮大な幻視に注目し、秩序ある総合体としての天上世界のイメージ生成論理を読み解きたい。